

千年杉の村から来た少女

大里峠に比べれば、萱野峠の山道はなだらかだった。とはいうものの慣れない牛に乗ってきたバードは、いつもとは違った疲れを感じていた。峠を降りてたどりついた足野水という村でひと休みすることになった。玉川に比べれば半分ほどの幅の足水川が流れている。宿屋をかねた農家の土間で休むバードが、聞いた。「このリバー、さっきのリバーに比べたらずいぶん小さいけど、上流にもまだ人が住んでいるのですか？」

イトーが日本語に訳すと、宿の亭主が答えた。

「ありますとも、ありますともまだ4つもあります。となりは市野沢、2番目は足水中里、そして菅沼、滝倉、そして樽口。あ、5つだな」

指折り数えて説明した亭主が照れ笑いをした。

「オー、ファイブもあるんですか」

「一番奥は、樽口と言って、樹齢千年もたつ大きな杉の木があるんです。その気の下に人間が立っても豆粒みたいにしが見えねえな。たいした杉の木だ」

「そんな大きな木、時間があつたらそこに行つて見てみたいですが、残念です」



そこへ、みの笠姿の男が現れた。

「こんにちは。よく降るなあつす」

「やあ、これは樽口の伊之助さん。噂をすればなんとかやら、今、英国のバードさんに樽口の千年杉の話をしてたところだ。どうしたんだすか」

伊之助の後ろから、小さな女の子が顔を出した。

「おー、プリティーガール、お名前は？」

「みれい」

少女は恥ずかしそうにポツリと答えた。伊之助が続ける。

「樹齢千年の太郎杉にあやかって、美しい齡と書いてみれいと呼ぶことにしたのです」

「おお、ビューティフルエイジですか。すばらしい名前ですね」

イトーの説明を聞いたバードが、にっこりと笑いかけた。

「いま、いくつですか？ハウ・オールド・アー・ユー」

「おら、十二歳」

「んでな、美齡がどうしても英国のご婦人に聞いてみたいことがあるってんで、訪ねてきたんだ。きのう樽口峠を越えてきた小玉川から来た人がいて、きょうあたり足野水に来そうだと教えてくれた。それで、美齡ば連れてきたんだ。川向この知り合いの家によせてもらって、お茶をごちそうになってたんだ。そうしたら、お前さま方が、牛に乗ってやつてくるのが見えたんで、来てみたわけだ。えがった、えがった。美齡、このご婦人に聞きたいこと話してみれ」

美齡はもじもじしながら、着物の懐から小さな白い丸いものを取り出した。小鳥の卵のようにも見えるが、毛が生えてふわふわしている。

「これ、カイコのまゆだけど、これから糸をとって、絹にして外国に売ってるとお寺の学校で聞いだけど、外国の女の人はどんな服を着ているかと思っただけだ。お寺の学校で聞いだけど、外国の女の人はどんな服を着ているかと思っただけだ。」

いぶん高く売れるってほんとかな」

「シルクですね。シルクはとても高級な織物です。シルクの服ですか。ああ、ちょっと待ってね。妹と一緒にシルクのドレスを着て撮った写真があるから」

そういうと、バードはカバンの奥から、旅行記をかねた日記帳を取り出した。日記帳を開くと、パリリと一枚の写真が出てきた。

「これは、妹の写真です。イギリスで撮った写真なの。私は妹が大好きなんだけど、旅ばかりしているから、なかなか会えないのよ。だから日記にはさんでおいて、いつも見れるようにしてあるの」

写真というものを見たことがなかった、美齡はじつくりと覗き込んだ。絵に比べるとずいぶん細かい。

「この服は、実は青、空の色なの。写真じゃ白黒になってしまっけどね、とてもかわいらしいのよ。」の服が絹から作ったものなの」



「んだが。こんな着物を来ているんだな」

美齡は、じーっと写真に見入った。

「おらも、こんな服れるべか」

「いや、実はこの美齡、大きくなったら絹織物を作る仕事がしてみたいって、言い出したもので、そんなことできるものですか？」

イトーが口を開いた。

「明治5年、日本のお上は群馬県の富岡というところに製糸工場を作りました。しつかりとした質の高い絹の糸を作るために、フランスから機械を輸入して模範工場にしたのです。そこには、お嬢さんよりもう少し年上の女の子がたくさん働いています。新聞で読む限り、立派な工場です」

「イトー、そういえばこれから行く秋田県では、製糸工場を見学に行くことになっていなかった？」

「そうです。何しろ、開国した日本が外国から稼ぐお金の1/3は、絹ですから、今一番はやっている産業なんです。国も、地方も力を力を要れています。美齡さんも秋田のあたりなら、行って働ける可能性があるかもですね」

「んだが？」

美齡が目を輝かせた。

「カイコはお前さまの国では作らないのかい？お前さまの国は日本からずいぶん遠かいんだへ」

イトーの通訳を聞いたバードが答えた。

「そつねえ、いまから180年も前に、チャールズ一世という国王が、初めて養蚕を始めたの。でも、カイコが食べる桑は、イギリスの天気には合わなくなかなか育たなかったの。エサがなければ、カイコは生きられませんからね」

「うんだ、カイコはもさもさと一日中桑の葉を食ってる。ガサガサと音をたてて、ほんとによぐ、食うんだ」

「でも、絹のドレスはみんな着たいから、糸は無理でも織物を織る工場は結構できたの。産業革命といって手で編んでいた織物を機械で編むようになったわけ。そのおかげで、三十年後にビクトリア女王が即位した時のドレスが、絹で造られたの」



そう言つと、バードはもう一枚、こんどは絵をみれいに見せた。

「へえ、こんな服なんだ。頭に帽子をかぶつて」

「それは、女王様になったという印なのよ。今では、絹織物の原料となる生糸は、日本や中国からどんどん輸出されているわ。だから、みれいさんが作った生糸もそのうちイギリスで立派なドレスになるかもしれないわね」

「絹の歴史については、僕にもひとこと言わせてください」

イトーが口を開いた。

「絹はもともと中国で生まれたものなんです。伝説によれば今から4000年も前の中国初めての王様である黄帝の奥さんが絹の作り方を考え出したという伝説があ

ります。それ以来、中国の王様やお妃やお金持ちは、絹の着物を来るようになったのです」

「それが、どうしてバードさまの国まで伝わっていったんだ？中国なら漢字が来た国だからしってるども、バードさまの国は、もっともっと先の、遠い遠いところにあるときいだけぞ」

「そうだね。中国の西の方、つまり太陽が沈んでいく方は、あまり雨が降らず砂漠や草原になっています」

「砂漠って？」

「行けども行けども砂や石ころばかりの土地だな」

「草原って？」

「草は生えてるが、木はほとんどない。砂漠も草原も広いんだ」

「海より広いが？」

「海にはかなわないが、とにかく広い」

「おら、海みたことね」

「まあ、中国の支配が及ぶのは、敦煌までだな。そこからは先は、別の民族がおさめるところになる。中国の絹は、その敦煌からラクダという馬の背中におおきなコブのある生き物に乗せられて、ずうっと西の方、バードさんの国まで届けられたんだ。イギリスは日本と同じで島国だから、船にも乗せられたらうね」

「その道のことを、去年ドイツの学者がシルクロードと呼び始めたの。なかなかうま

い名前をつけたものだと関心しているのよ」

バードが付け加えた。

「絹の道が」

美鈴がつぶやいた。

